

令和3年度「不登校に関する研修会」(第2回) 講義記録

1 日 時 令和3年8月12日(木) 10:15~12:00

2 場 所 県立総合体育館

3 講 師 立命館大学大学院教職研究科 春日井 敏之教授

4 テーマ 子どもの理解と保護者支援のあり方
— 『コロナ時代』の不登校の子どもに寄り添う —

5 内 容

(1) コロナ時代と子どもの課題

- ・「コロナ時代」も2年目になり、子どもも教師も保護者も2年分疲れている。「人生の潤滑油」とも言うべき、たわいもない話や遊びなどができなくなり、充電できずに放電ばかりという状況が続き、しんどくなっている。体力的にも落ちている。そんな中で子どもたちは、例えば「鬼滅の刃」を読んで自分自身の状況と重ねたり、「あつまれどうぶつの森」で会えない友だちとつながったりして、いろいろ子どもたちなりに思いながら過ごしたのではないか。
- ・コロナウイルスによる新しい課題…「病気、不安、差別」(日本赤十字社)。家でも学校でも頑張っているような「良い子」ほど息切れしている。
- ・学校に通うことの意味とは…①協同の学びの場。②協働の生活の場。③家族の生活・仕事を支える場。④セーフティーネットの場。⑤ケアの場。
- ・コロナ禍で、人間関係とコミュニティが寸断されている。学校は「つながって生きる場」として、一緒にいる時間と空間と意味の再構築をしていくことが大事。
- ・子どもたちは、基本的に真面目で優しい子が多く、親や教師の期待に応えようとして頑張る。大事なのは、子どもが親や教師の期待に応えられない時に、周りの大人がどういう声をかけるか。子どもが失敗した時ほど、「それでも親や教師は見捨てないでちゃんと愛してくれている」と実感できること。
- ・子どもたちの気になる言動は、子どもから大人へのSOSのサイン。誰にどんなSOSを出しているのかを考えることが、指導や支援への入り口になる。
- ・子どもは社会や大人を写す鏡。子どもに対しては、威圧的・操作的な関わりではなく、対話的・共感的な関わりを大事にしてほしい。
- ・いろんな子ども、いろんな大人がいて当たり前。親や教職員が「明るく元気で前向きないい子」ばかりに焦点を当てたり、そのような子どもの姿を求めたりし過ぎると、「目立たなくておとなしい、内向的な子」の気持ちや存在が見落とされてしまう。このような子どもと対話のチャンネルを持てるようにしておくことが大切。

- ・子どもの発達のだん筋…①発達には個人差がある。②人は一生発達する。③人の発達にはらせん状の円環的な過程をたどる。
- ・思春期は「第二の誕生」。自己の解体・再編が課題となる。その一方、この時期に形成される子どもたちのチャムグループでは、つながり依存や同調圧力が起こりやすく、仲間外れにならないように、自分の心に蓋をして周りに合わせるが多くなるため、主体的な「自分」が育ちにくい面がある。
- ・大人はストレスを言語化して伝えることができるが、子どもは幼いほどストレスを身体化・行動化してしまう。身体化とは、過敏性腸症候群などの心身症のことで、身体がSOSを出している状態。行動化とは、人や社会に攻撃性を向けることで、いじめもその例である。今気になるのは、摂食障害や自傷行為、不登校など、攻撃性が自分自身に向かう場合。
- ・親や教師が「どんな子どもを育てたいのか？」を考える時に、自分の人生を自分のために頑張るという「自立性」と、自分の頑張りを通して自分につながる誰かを助けるという生き方を志向する「協働性」の2つを育ませることが大事。その際に、「問う（どうしたのと声をかける、子どもの言動の意味を考える）」「聴く（事実と感情を聴き取る、一緒に考える、言語化を急がない）」「語る（自分の葛藤や失敗を語る、うれしいといった自分の気持ちを伝える）」といった対話的關係が大切である。
- ・文化の創造・継承の場や、子ども同士が活動を通してつながっていく場として、行事や部活動は重要である。一方、ネット社会のバーチャルな居場所を求める子どももいる。思春期葛藤とネット社会は親和性が強いが、落とし穴もあるので注意が必要。

(2) 思春期の子どもとの関わり方

- ・子どもを認めること＝①能力レベルで認めること（ほめる、頼る、励ます）、②存在レベルで認めること（ねぎらう、赦す、守る）。子どもと心地よい人間関係を築くためには、ものを頼んだり、分からないことを教えてもらったりする時に「ごめんなさい」「悪いけど～～してくれる？」「教えてくれる？」をつける。子どもの気持ちを聴き取る時には、「どうしたん？」「どうしたいん？」「それでいいんちゃう」がキーワードになる。解決を請け負うのではなく、共に悩み、一緒に考える隣人になる。
- ・思春期の子どもの自己主張は、親や教職員から見れば「反抗期」に映る。親や教師は、自己愛の延長で子どものことを見てはいないだろうか。主として親子関係で生まれる愛着関係の課題は、他の人間関係での埋め戻しが可能である。また、結果にはこだわりつつ出た結果にはこだわらないことも、プロセス評価の意味として重要。
- ・社会に適応してだけでなく、社会をよりよく変革していく主体になっていくためには、「つながって生きる」（①誰かを助けて生きる、②誰かに助けてもらって生きる、③誰かと一緒にやりたいことを目一杯し・て生きる）ことが求められる。

- ・「自分が自分であって大丈夫という感覚」としての自己肯定感は、高いか低いかで誰かと比べるものではなく、他の誰かが育てられるものでもない。子どもたちが学校でも家庭でも居場所があり、いきいきと色々な取組ができる中で、つながりの実感が生まれ、「気がついたら身につけている感覚」ではないか。
- ・子どもの心に寄り添うということは、子どもの生活・感情・願いを丸ごと受け止めること。具体的には、「あなたはどうしたい?」「お父さん、お母さんにはどうしてほしい?」「担任の私には何ができる?」といった問いを大切にしていくこと。
- ・子どもの主体性を育てていくためには、自己決定+応援付きが大切。自己決定には二つの意味があり、一つには、子どもの自己決定のプロセスを応援すること（相談に乗る、進学希望の学校と一緒に見学するなど）、二つには、自己決定の成否に関わらず応援し続けること（子どもが失敗や挫折をした時に励ましたり、助けたり、寄り添ったりするなど）。こうして、子どもは自前のエンジンに自分の手でスイッチを入れられるようになっていく。
- ・非認知能力については、数値化できるものではなく、その子どもなりの「生きがい」「やりがい」「意味のある他者との出会い」「双方向の関係」「対話的・受容的關係」「安心感・信頼感」「否定されないこと」などが大切にされることで、初めて身に付いていくのではないか。
- ・ほめることも叱ることも、評価を伴う行為。褒められ続ける子どもはプレッシャーを感じ、叱られ続ける子どもは人間不信になる。かけがえのない存在に愛と敬意を払うことが大事。その姿勢が伝わると、ほめることや叱ることも伝わっていく。
- ・情報の取り扱い方や、プライバシーやハラスメントの問題で被害者にも加害者にもならないためのメディア・リテラシー教育、子どもに「10年後、どんな人間になっていたか」「何のために生きているのか」「あなたは何を一番大切にしているのか、その理由は?」と問う進路指導・キャリア教育も大切である。

(3) 不登校の現状

- ・これまでどれだけ様々な手立てを打っても、不登校の子どもは増え続けている。直近の文科省調査の特徴は、いじめ・不登校・暴力のいずれも小学校、とりわけ低学年での増加が見られること。
- ・2016年の「教育機会確保法」の成立によって、NPOやフリースクールなど、既存の学校以外の場での教育機会の確保、そのための国や地方自治体の財政的支援などが責務となった。また、文科省も不登校支援について「既存の学校への復帰を前提としない」という通知を2017年に出している。そうになると、問われるのは学校の存在意義、あり方。
- ・不登校支援に関する政策動向については、2015年の中教審答申でSCやSSWの専門化についての議論、2017年の「教育相談等に関する調査研究協力者会議」で教育

- 相談コーディネーターの配置、ケース会議、教育相談体制等の提言がなされている。
- ・ちなみに、15歳から64歳までの年齢を対象にしたひきこもりの数は、現在105万人いると言われている。これは、今年高校を卒業する18歳人口（約115万人）にほぼ匹敵する数である。
 - ・ひきこもりのきっかけについては、内閣府の調査（2010）によると、大学卒業までは大きな挫折もなく凌いできたと思われる若者が、就職後や就活のつまずきでひきこもりになった割合が計44%と高く、小中高での不登校の延長としてのひきこもりは11.9%にとどまっている。小中高校で不登校になり、周りにSOSを発信できたこと、その中でいい援助者に子ども、親が出会えたことの意味は大きいのではないか。
 - ・支援のためのケース会議では、アセスメントとプランニングが大事。以下の5点がポイントになる。①問題解決を志向する。②困っている人を救う。③キーパーソンを探す。④援助資源（リソース）を探す。⑤ミニ・チーム会議を開く。
 - ・不登校へのネットワーク支援…①アセスメント、②作戦会議、③ケース会議（事例検討会）、④専門機関との協働、⑤学校改革、⑥子育て支援、⑦地域の居場所、⑧進路選択の支援、⑨ひきこもり支援。

(4) 不登校の支援について

- ・「待つ」ことの意味と広がり…短期・中期・長期の視点から子どもの成長を「信じる」、日常生活での小さな自己決定を尊重して子どもに「任せる」、子どもの回復段階に応じた働きかけをしながら「待つ」。
- ・SOSの発信としての不登校…「理由を聞かれてもよく分からないから困る」といった当事者からの声も多い。大切なのは、不登校の原因探しではなく、不登校という自己決定を通して子どもは誰にSOSを発信しているのかを探ること。
- ・不登校の回復プロセスの理解…「前兆期→混乱期→安定期→転換期→回復期」という流れを辿る「がんばりすぎの不登校」への理解と回復段階に応じた支援を。
- ・保護者は子ども支援のパートナー…不登校も含めて、子どもが学校生活で苦戦している時に、保護者を責めたり否定したりせず、ねぎらい、励ますことが大切。
- ・トラブル、いじめ等が原因と思われる不登校…自分の尊厳や命を守るために、緊急避難として学校に行かないという場合はあり得る。親は、まずは我が子を守る立場に立つ。学校は、事態が判明した時点ですぐに介入して指導・支援する。解決の方法は、「和解する」「しばらく距離をとる」「関係を解消する」の3択から当事者が選択する。
- ・家庭で元気になっていくことの大切さ…学校には行けてなくても、家族の中で元気になってきたという変化は、重要な回復であるということを、親と共有していく。
- ・配慮・支援を受ける立場から支援する立場に…少し回復してきた段階で、ささやかなことであっても、家族や誰かのために何かできることはないかを考えたり、誰か

のために何か役に立つことを依頼したりすることで、自前のエンジンにスイッチが入ることも多い。

(5) 不登校の回復とは

- 不登校の「回復」とは、人格が変わって学校に行けるようになることではなく、自分の課題を知って、持ち味を活かしながら社会とつながって生きていこうとすること。
- 子どもたちが自分の不登校体験を意味づけ、自分の存在自体に意味をつかみ、自分で生き方を選び取っていくことが大切。
- 不登校の背景・要因としての「社会」「学校」「家庭・地域の在り方」を見直していくことも、不登校問題の克服として重要な視点。